

# どっこい生きてます!



潮騒JTCでは入寮者にいろいろな回復プログラムを提供していますが、その看板とも言えるのはエイサー（琉球太鼓）の取り組みです。メンバーが固定しにくいハンディを抱えながらも、忙しい日常活動の中で時間をやり繰りして練習を続け、あちこちから出演要請が増えています。今年は秋のフォーラムに向け、千葉ダルクメンバーとの合同エイサー練習にも力を入れています。両者のコラボ演舞も力量がアップしており、10月20日のフォーラム本番が楽しみです(9ページに記事)。

2019

7

## 我が身の16回目の 「クリーンバースデー」に思う



(左から)おべ君、旭君と栗原センター長▶

6月下旬から本格的な梅雨に入り、7月上旬には積乱雲の連続発生による激しい雨が降り続く線状降水帯が西日本に停滞して集中豪雨が九州南部を襲い、大きな被害が出ました。また、長引く日照不足と低気温の影響で農業に大きな打撃を及ぼしただけではなく、各方面にも被害が広がりました。そんな暗い話題が続くうとうしい天候ではありましたが、7月7日の七夕は妻(女性ハウス「るみの家」施設長、栗原ルミ)と入籍した記念すべき日であり、16年目を迎えた私が大切にしているバースデーでもあります。なぜ76歳にもなった私が16回目のバースデーなのかは、潮騒通信を読んでいた方々にはお分かりかと思います。飲み続けたアルコールと覚醒剤による幻覚と幻聴にあえぎ狂っていた状態の私が、ある出来事をきっかけに七夕の日をもって「止める」と誓った記念すべき日なのです。そして、そのことをきっかけに、まだ漠然とはしたものでしたが、現在の潮騒ジョブトレーニングセンター(JTC)の創設を思い立つ契機にもなった日でもあります。

それは鹿島ダルクでスタッフをしていた頃の出来事でした。キリスト教会を会場に薬物依存症の仲間たちが集って行われたNA(ナルコティクス・アノニマス)のミーティングにダルクの仲間3人で参加した帰り道でのことでした。突然降り出した夕立を避けて飛び込んだ雨宿りの店で、勢いにまかせてビールを飲んだあげく私は日本酒にまで手を出してしまったのです。施設のグループ・ミーティングでは、何事も隠し事をせず正直に話すことが求められます。飲んだ代償として仲間たちと共に毎日の小遣いとして貰う現金を現物支給にされるという罰が与えられました。そのとき、責任者でもあった私はアディクト(依存症者)への罰という考え方に疑問を持ったのです。私は一緒に巻き込んでしまった責任として仲間を守る側に立つと決め、七夕の日を境に断酒と断薬を決意して二度と手を出さまいと誓い、実行してきました。あれから16年。スリップ(再飲酒、再使用)することもなく現在まで続いています。

アディクトには、この世に生を受けたリアルタイムバースデーとアルコールや薬物などと決別した日を記念するクリーンバースデーがあります。何度もスリップを繰り返す人は、その都度クリーンバースデーが変わることもあります。しかし私は、そんな仲間だからこそ自分の家族として受け入れていくという考えのもとに潮騒JTCの運営に携わっています。鹿島ダルクから独立した潮騒JTCも現在は約200人を超えるアディクトたちが利用し、回復の日々を過ごしています。私もアルコールと薬物に溺れた半生を送ってきた当事者です。いまだに断ちきることの難しさを実感しています。止めようと思っても止められないのが依存症という病気です。服役を重ねるごとに職場や家族を失って社会の中に自分の居場所を見つけられず、立ち直ることの出来ない難しさも味わいました。その居場所を提供しているのが潮騒JTCです。安定した環境の中で自分の問題を考えながら己と向き合い、見つめ直すことがアディクトの回復にとって重要なことです。アルコールや薬物に頼らない「新しい生き方」をする仲間の手助けをするためにもクリーンを継続し、後ろ姿を見せることが必要だと思っています。飲んでいた当時の私の罪を問わず、「ダルクへ行きなさい」と背中を押して許してくれた担当検事の言葉を守って迎えられた特別な意味を持つ七夕の日。決意を新たに「今日一日」を積み重ねていく覚悟を固めています。

(センター長 栗原 豊)



# 潮騒 人間塾

元スタッフで神学生 海東 強さん

「潮騒が自分の回復について  
目覚めさせてくれた」

社会で働く幅広い人たちから人生について学ぶ「潮騒人間塾」が6月11日、潮騒アディクションビレッジ会館3階で開かれ、潮騒JTCの元スタッフで現在は働きながら牧師を目指し、キリスト教神学校に通う海東強(たけし)さん(43)が講師を務めました。男性では比較的珍しいアディクション(摂食障害)を持つ海東さんですが、幼少時から生きづらさを抱えて育ち、出口の見えない自分探しの苦悩を経て、やがてキリスト教信仰へと導かれた自身の歩みを忌憚(きたん)なく語りました。また縁あって潮騒JTCで仲間の回復支援の役割を与えられたことで、自分の問題に向き合う転機となったことも明かしてくれました。

—

講演で、「生きづらさを抱えていることでは皆さんと同じだった」と切り出した海東さんは、家父長主義を体現する父親と共依存の母親という「健全ではなかった」公務員家庭で育ちました。次第に「自分は生まれてきてはダメな人間だった」と思うようになり、小学生の頃から精神安定剤を服用したと言います。

海東さんにとって家庭とは「安心して過ごせる場所」ではなく、「常に緊張を強いられる場所」でしかありませんでした。「世間体が重要視される」公務員家庭ゆえに、見た目だけは「いい子」を演じることが求められ、やがて精神的ストレスから過食と拒食を繰り返すようになりました。

ありのままの自分を肯定できずに重い摂食障害に苦しみながらも、やがて大学を卒業して社会人になると地方新聞記者の職を得て、「書く」ことで才能を開花させます。その結果、多角的な視点から捉えた喫煙問題をテーマとした連載記事が第23回ファイザー医学記

事賞を受賞し、周囲を驚かせました。その後はいったん記者業から離れて、青年海外協力隊員としてアフリカ最貧国のマラウイにエイズ対策ボランティアとして赴任し、人生の充実期を迎えます。

しかし、遙か異国での慣れない生活やストレスなどから予期しない難病が彼を襲い、任期をまっとうできずに帰国。闘病生活も一段落すると再び地方新聞に記者として復帰しますが、以前とは異なり人間関係などで深く悩み続ける日々が続きました。このため何度か転職を繰り返しながら、自分探しの迷路にはまった海東さんでしたが、縁あって約7年前に潮騒JTCにつながり、スタッフとなる幸運を得ました。

海東さんは潮騒JTCでの数年間を振り返り、「自分の回復について目覚めさせてくれた」「同じ生きづらさを抱える仲間がいることで救われた」と語りました。自分の家庭や職場と違って潮騒JTCが「自分の無力を認め、本音で生きられることが許される居場所」となり、人生の大きな転換点となったことを明かしました。海東さんはその後、体調不良で潮騒JTCを離れたものの日本ダルク新聞の編集制作に携わり、やがてキリスト教信仰者として目覚め、牧師を養成する都内の神学校に通うようになりました。

講演のなかで海東さんは、ともすると誤解されがちな回復プログラムの要とも言える「ハイヤーパワー」について信仰者の立場から理解を示し、その霊的な回復メカニズムに深い共感を寄せました。その上で「私を気づかせてくれた依存症の方々と一緒に回復していきたい」と述べ、入寮者に「無理なく回復してほしい」と呼び掛けました。講演後には栗原豊センター長をはじめ、潮騒のかつての仲間たちと再会する場面もありました。



# るみの家

## 家族面談の試み

いるか

### 母親に回復を認められたことが 何よりの贈り物

私は今まで40年くらい薬物を使い続け、薬がないと生活できない状態でした。施設につながる前の私は体重が38kgくらいで、食事もとれず、何もできず、病院に入院して退院と同時に横浜ダルクの男性スタッフの方が「るみの家」まで送って下さり、潮騒JTCに入寮しました。

施設に入寮する前の私は、母親に迷惑ばかりかけてきました。クスリを使うため、お金がないからウソをついてだましとったり、盗んだり、母の家にあるお金になる物を持っていき、売ってお金にしてクスリを使っていました。何度も何度も迷惑をかけ、ケンカをして関係が悪くなっていました。

私は子供の頃、おじいちゃんに育てられ、母は働いていましたが、私と一緒に生活をしていた思い出がありません。そんな母親だから、私が迷惑を掛けたっていいじゃないか、と思っていました。施設に来る前に入院した病院から「お金がないから持ってきて」と頼んだら、母親に「もういいかげんにして。私の生活の事も考えて。もう二度と連絡してこないで」と、最後の言葉になってしまいました。もう会うこともできないな、と思っていました。

施設につながってから回復のプログラムをやっているうちに、母親が生きているうちに親孝行しなくちゃ!って思うようになり、まずは「今日一日」の教えに従いグリーンを続けようと頑張りました。そしてグリーン3年目の6月に1回目の母との面会が与えられました。その年に母親は12月のフォーラムにも泊り来て、面会もできて、一緒に泊まり2人でゆっくりいんな話をしました。

母を恨んだり、迷惑をかけてばかりいた私ですが、今は心穏やかに感謝できます。年をとってきた自分ですが、母親の身体が心配です。私は薬の後遺症で幻

聴、幻覚、勘ぐりが入り、人間関係で苦しみ、今でもまだつらい日があります。手や足のしびれ、声は泣いているような話し方になるし、クスリの代償が与えられています。体は思うように動かず、今では足を引きずりながら歩いています。当たり前なことがなかなかできず、恥ずかしい限りです。

今年の6月、2年ぶりにまた母に面会できました。1回目、2回目とも面会は母が施設まで来るのが困難のため、母の家から少し離れた首都圏のK駅で待ち合わせをして、3～4時間、駅付近で食事をして、お茶をして、たくさん話して、手をつないで歩いたり、子供に戻ったようでした。こんな日が来るとは思っていませんでしたので、夢のようです。神様、ありがとうございます。そして、施設長のルミさん。毎回一緒に、母に会うため、付き添ってくれて、気づかいをしてくださり、感謝しています。

毎回6月の面会は5月の母の日が過ぎてしまうのですが、1カ月遅れた母の日のプレゼントやわずかですがお小遣いを渡せて、少しだけ親孝行ができているかな? なんといたってもクスリを使わずに今年でグリーンタイムが5年ですから、母が安心してくれています。母親に「あなたは変わったわね。嬉しいです」と言われたことが、私には何よりの贈り物です。お母さん、元気で。また逢える日を楽しみにしています。

くま

### 母と2人で 1泊2日の幸せな時間を過ごせた

摂食障害・クレプトマニア(病的窃盗)の私は7月8日、9日の1泊2日、母とゆっくり過ごす時間を頂きました。8日午前中に母と落ち合い、香取神宮を訪れ、ゆっくり、じっくり境内を見て回りました。本殿にたどり着くまでの道すがらの風景は、大変興味深いものであったため、母は幾度も立ち止まっては写真を撮っていました。

香取神宮は、国の重要文化財に指定され、日本遺産認定ということですが、それに十分納得できる厳かな佇(たたず)まいで、心静かな落ち着きをいただくことができました。以前、横浜で生活していた頃、私は母と鎌倉のお寺巡りをして、寺の社を眺めて楽しむこともあったので、その頃独自の穏やかな雰囲気は私の中によみがえってきて、なんだかうれしい気持ちになりました。

その後、香取市の佐原に移動し、小江戸の町並みも散策しました。利根川に続く、小野川沿いをたどっていったのですが、古民家の造りを大切に残し、維持さ

れているその佇まいには、古き時代にタイムスリップしたかのような感覚にも陥る気がしました。「こんなところがあるなんて、ホント、ビックリね」、「こういう所が残っているっていいね」といった話をしたりもしながら、ゆっくり歩みを進めて行きました。

宿泊したところは、7月8日開店の駅前にできたホテルで、ホテルのコンシェルジュはとても朗らかで感じが良く、この場所を進めてくれた施設長のルミさんに感謝の思いでした。小江戸の町並みを歩いている時も、ホテルの部屋で落ち着けた時も、私は自分の感じている思いや、以前の自分とは違う気付きを得ている事、自分の心に変化が起きている事を正直に母に話し、伝えました。私の心の成長や変化が起きていることを感じ取ってくれた母は、そのことに対する喜びの気持ちを私に話してくれました。

亡くなった父が、ベッドの中で私の事を気にしていて、声にならない声で私の名を呼び続けていたりしたことを話してくれた時、私は涙がにじみ出てきて、胸がじーんと熱くなりました。年をとった母に対するたくさんのさまざまな思いで、私の心はいっぱいになっていて、いつでも、どんな時も、母のそばから離れたくない、力にもなりたい、という気持ちが私の中でぱんぱんになりました。でも、母と一緒にいられる時間は現実には限りがあって、それを受け入れざるを得ないことも認識しました。1泊2日は私にとってはあっという間でした。

時間を気にしながら歩みを進め、落ち着かない思いで苦しくもなったりしましたが、元の場所に戻ってきたとき、夢のような時間は冷め、現実に戻されました。でも、いい思い出は私の心を満たしてくれました。久しぶりに、本当に幸せな時間を過ごせたと深く感じている私は、今回の機会をもたせてもらえたことに深く感謝の思いを持ちました。そして、また1日1日、頑張っていくこう!と元気な気持ちにもなりました。生きていくことは大変だけれど、素敵なことでもあるかもな、と思いました。

マコ

### 娘から渡された手紙に 涙が止まらなかった

先日、ルミ施設長の配慮により、2年ぶりに娘との面会を果たすことができました。面会の目的は、娘の結婚の報告(令和元年5月15日入籍)でした。写真を撮り終えて、ウエディングドレスとタキシードの2人の写真を見せに来てくれたのです。娘はとても美しく、

旦那様はりりしく優しくそうで、親としては何よりです。かつて私はアルコールに溺(おぼ)れ、生きることがどうにもなくなったり、息子と娘との一緒に生活を諦め、潮騒JTCにお世話になることになりました。約3年前、当時フラフラの状態施設にたどり着きました。

その頃の私をよく知っているから、娘は久々の母の姿を見てうれしそうでした。話す口調や笑顔がとても生き生きしていました。あの頃の私とまるで違うから、とてもうれしかったのでしょうか。約3時間位、あっという間に過ぎました。

話す内容はこれからの未来のことばかりで、今、旦那様が事業を立ち上げたばかりなので落ち着くまで一年くらいは子供を作らず、焦らないとか、彼の勧めで娘は仕事も辞め、今は専業主婦に徹しているとか、また、いずれ手伝うであろう旦那様の事業(サポート)のため、経理の勉強をしているのだとか。娘の明るい未来を聞いているだけで幸せな気持ちになりました。過去には親の離婚、私のアルコール依存症という病気などで、娘は悲しくつらい思いをたくさんしてきたせいか、とても強くたくましく、優しい素敵な女性に私の目にはうつりました。

その後、食事を終えてから私の就労先の“おらげのかまど”に行き、皆さんに挨拶(あいさつ)をさせ、また自己紹介をし、最後にまた施設に戻りました。どうやら娘は私(母)の働いているところが見たかったようです。最後、別れ際に手紙を渡されました。「後で読んでね」と言われ、大事に持ち帰りすぐに読みました。

手紙の内容は、私の病気のことです。娘はずっと何年も悩んでいたとのこと。私が離婚して、女手一つで子供2人を社会人にまで育て上げる意思で働いて、父親役、母親役、時には友達にもなり、多忙な日々のせいで私の身体が病気にむしばまれていくのを、娘は子供ながらに見てて、苦しんでいたのだと…。でも、そのつらい経験があったからこそ、今までも、これからも、どんなにつらいことがあっても乗り越えていけると書いてあり、最後に「産んでくれてありがとう。育ててくれてありがとう。愛しています」と書かれてあり、私は涙が止まりませんでした。

今後の私の回復をさらに助けてくれるような内容でした。ここでの生活が3年過ぎ、本当に心も身体もクリアになり、娘の幸せを確認できた自分は、本当に幸せです。最高の一日でした。栗原センター長、ルミ施設長に感謝しています。ありがとうございました。

近藤恒夫さんメッセージ

失敗しても  
やり直せばいいじゃないか

第1回 私のヤク中人生は  
フェリーでの歯痛がきっかけだった



## ダメと言われるとやりたくなった

日本ダルクの近藤です。潮騒で話すのはもう何回目なのか分かりませんが、こうして機会を与えられたことに感謝します。私も寄る年波には勝てないと言うべきなのでしょうが、あちこち体にガタがきています。でも、この前、思い切って目の手術をしました。白内障のね、で、以前よりよく見えるようになった。視野が広がって、好きなクルマの運転がとても楽になったんです。当分、運転免許の(自主)返納なんてしなくてもいい感じだな。

でもね、俺は基本的に医者の話は信じないことにしている。何たって私のボスは私ですから…。私は医者が苦手というか、あまり好きじゃありません。だけど日本人ってやたら医者と薬への信仰が強いでしょう。医者の言う事は絶対だ、とね。だから、ちょっとしたことでも病院に行く。何かというと医者に診断を受け、病名を付けてもらうことで安心する。処方された薬を真面目に飲み続ける。でも、「病は気から」ってこともある。よく「いい薬になる」って言うでしょう。薬の基本は毒をもって毒を制するってことも忘れちゃいけない。

そういうことで、僕は人の言うことは聞かないというか、ダメだと言われるとその反対のことをやりたくなるたちなんです。エレベーターに乗って、このボタンを押すなど書いてあると、無性に押したくなる。

ヤク中って、みんなそんな変なところがあるでしょう？へそ曲がりというか、世間の流れとは反対の方向に行きたがる。つまりダメだと言われると、その反対のことをやりたがるんだな。根っこが子供じみている。そんな感じで生きてきたから、この年(78歳)になってもね、世間の波にはなかなか素直に乗れないんだよ。

そんな生き方だから、若いころダメだという覚醒剤

をやってきた。あれがダメって言われなければやらなかつたろうな。ダメだって言うから、じゃあ一回ぐらいいやってみたいな、となってしまった。一回ぐらいいならやめられる。俺がはまるはずなんてない。でも、やったところが見事にはまってしまった。たった一回でな、どうやら俺の体には依存症になる下地があったんだな。

## 一週間続いた歯痛がピタリとやんだ

当時、僕は20代後半で日本海側の小樽と舞鶴を往復するカーフェリーの調理部門の責任者だったんだ。ある時に歯の痛みが一週間も続き、どうにも我慢できなかった。そんな時に顔見知りの長距離トラックの運転手から「近藤さん、いいものがあるよ。一発で痛みが消える」って教えられたんだ。腕を出して覚醒剤を打ってもらったら、一瞬のうちに痛みが取れた。俺にとってはまさに魔法のクスリだった。あれほどひどかった痛みが一瞬で取れて、30センチぐらいの絨毯の上をふわふわ歩いている感じだった。

あの時、歯の痛みさえなければ俺は覚醒剤をやらなかったかもしれない。いや、そうじゃないんだな。あの時がクスリに出合うタイミングというか、覚醒剤にハマる運命の瞬間だったんだらうな。それまで俺はクスリなんかにはまるはずがない、歯の痛みさえ取ればすぐにやめられると思っていた。それが一週間続いた歯痛がピタリとやんだ。

ところで冬場のカーフェリーは何もすることがないから、マージャンやチンチロリンをやって時間をつぶしていた。でも、この時はトータルで350万円も勝ってしまった。相手は長距離トラックの運転手だろ、運航費を持っている。それをまきあげたようなもんだ。俺も賭け事が大好きだから、サービスのつもりで客

の相手になっていたんだけど、この日はクスリの報酬効果というか、感が冴えるんだよ。サイコロの目が読めるし、積もるパイが見える。分かるんだよ。感覚が研ぎ澄まされるから。俺は天才だと思ったね。

だから歯の痛みが取れたらやめるはずが、「こりゃいい、仕事につかえるな」と思った。それからは寝ないで仕事をした。みんなが起きてる時には仕事をしないで寝たら仕事をする。それにクスリやるにはフェリーの船内はもってこいなんだ、警察も追っかけてこないから。今から40年ぐらい前だけど、その頃の長距離トラックの運転手は、覚醒剤やるのばっかりだった。だからクスリ使うのには丁度良かった。初めて打ってから一週間後には、一日に3回打つようになっていた。俺の場合のめり込み方が半端じゃなかった。

### 3億円の男が天国から地獄に転げ落ちる

それで俺はドツボにはまってしまい、半年ぐらいすると船から一歩も出られなくなってしまった。俺は陸に上がったらお金(船内の飲食部門の総売り上げ)をもって会社の事務所に届ける役割だったのが、それもできなくなった。責任者がそんな状態だから、船内は大変だった。

よく言うけど、依存症の人たちは人一倍、一生懸命にやるんだよ。でも、長続きしない。だから当時は社内で「3億円を売り上げる男」なんて社員に持ち上げられて有頂天になっていたのが、天国から地獄に転げ落ちたような感じだった。その会社には8、9年働いていたのかな、何しろ責任者がこけたわけだから、そりゃ大変だった。

そんな状態ではもう仕事は続けられない。辞めるつもりで退職金の計算をしていたんだ。これだけもらえるだろうから何年間はしのげる、という計算だった。それに辞めても船員保険金があるから、それでなんとかなる、とかな。でも、覚醒剤をやめるという考えはないわけだから、そんな金はすぐにクスリに消えちまったよ。お決まりのようにサラ金に手を出し、やがて多重債務となって、あちこちのサラ金から督促状が舞い込むようになった。

俺は、朝起きて郵便さんが来るのを待ち構えていて、サラ金の督促状を受け取って、それを破る。家族に見られたくないから。それが日課のようになっていた。一番困るのは土曜日と日曜日、学校が休みだか

ら子供がいるし、家族がいる。あの時は、こいつらさえいなけりゃいいのになあ、って思った。

とにかく、毎日どうしたらクスリ使えるかってことしか頭になかった。で、そのうちに女房が新興宗教に入って、教祖かなんかに教えられたんだろうね。俺の枕元に毎朝、花を置いたり、毎日きれいな水を置くんだ。それもヤク中にとっては好都合だよ。きれいな水で覚醒剤を溶いて、それを注射器に入れて…って感じだね。自分の部屋の中で血の付いた注射器を洗えるわけだ。わざわざ台所に行く必要もない。なにより家族に会わないで済むだろう。

### 昔の仲間と一緒に逮捕され札幌拘置所へ

そんな感じだから、すぐに船員保険金も使い果たし、サラ金も貸してくれない。どうしたらクスリを入手できるか…。そうなると昔の仲間を頼るしかない。船から降りても、それまで一緒に船に乗っていた若いやつをつかまえて、そいつに覚醒剤を買わせていた。そいつと一緒に覚醒剤を使っていたのが、ある時そいつが俺に電話してきた。「鼻から煙突が見える!」って。ああ、こいつ、ついに来たかって思ったね。

そいつは血液型がA型だからテンパリやすいんだ。俺はO型だから以外にテンパらないでいられた。そいつ、Yって言うんだが、電話で「鼻に監視カメラが回っている」「おれは狙われている」「やられる前に警察に自首する!」とか訳の分からないことを言うんだ。慌ててやつの所に行ったら、家の中にまだ使っていない覚醒剤が残っていた。もったいないからそれを使っていたら、いきなり警察官が7人ぐらい踏み込んできた。「お前のか?」っていうから、「いや違う、Yのだ」といったが、一緒にパクられてしまった。あの時はYに悪いことをしたなあ。

そんな状態で捕まって、俺は裁判を受ける羽目になり、札幌拘置所に3か月ぐらい拘留された。俺は元来、多動型の人間だから、じっと何もしないで拘置所内にいるのはとても苦痛だった。ただ、その前に精神科病院に入った経験があったんだ。家族が精神保健福祉センターに相談して、そこで俺が病気だと言われてびっくりして入院することになった。1970年代だったな。でも、病院ではやめられなかった。それで最終的には警察のお世話になったんだ。(次号に続く)

※遅くなりましたが、3月に実施した潮騒人間塾の近藤恒夫さん(日本ダルフ代表)講演を、その後の追加取材を加えて連載します。



## 第7回 12ステップ理解へのアプローチ

### ステップ3 (後半)

#### 「神の配慮にゆだねる決心」を どうとらえるか?

—前回に続く神の話ですが、これまでにハイパーパワーやスピリチュアルというような神を連想する言葉が出てきました。どのように理解したらいいのでしょうか。

確かに、「ビルの物語」のビルのように自分を越えた偉大な力を持つハイパーパワーや目に見えないスピリチュアルな霊的経験の源となった存在を神としてもいいのですが、神に定義はありません。前回説明のように「自分なりに理解した神」というのは、それぞれが信じてみようと思った神であるならば何でも構わないのです。

—神という言葉が出てくると、その概念をすぐに受け入れられる人とそうではない人がいますが…。

そうですね。普段の生活の中で既に宗教を信仰している人もいれば、全く宗教とは無縁の生活をしてきた人もいます。米国で出版されたビッグブックの執筆者の中にも神の存在を認めないとする無神論者や、神の存在は証明できないと主張する不可知論者のアルコールクたちもいました。この本が企画された際、宗教の問題については相当な議論が交わされたようです。米国人の多くがクリスチャンであり、その人たちが崇める神はイエス・キリストです。しかし、ビッグブックに出てくる神はキリストではありません。そこで、神の存在を「自分なりの神」とすることによって議論に決着をつけたのです。そうしたことで神の汎用性が保たれ、宗教の信仰者だけでなく無神論者や不可知論者にもそれぞれの神を持つことができるようになりました。

—プログラムでは、なぜ神を必要とするの?

ステップを学んで成長していく過程で、なぜ神を必要とされるのか理解できるようになります。ステップ4以降は、「棚卸し」と「埋め合わせ」の作業をしながらステップを進めていきます。過去を反省して自分を変えるには、神に祈り、そして誓わなければなりません。そこで「自分なりに理解した神」が必要になるのです。ですが、ステップ3で理解した神は、まだおぼろげでも構いません。百パーセント信

じていなくてもいいのです。

—信じようとした神が、おぼろげな神でもいいというのは、どういうことでしょうか。

矛盾があり疑問に思われますが、ステップを進めていく過程で神の存在が段々明確になっていきます。そして自然に手を合わせ、祈っている自分に気付くでしょう。

—まさにスピリチュアルな気付きですね。

自分の意志で生きてきたこれまでの人生は敗北でした。その意志と生き方のすべてを偉大な力を信じた神にゆだねると「決心」するのでですから神が必要です。

—「決心」をするときに注意することは?

独りで始めると間違った解釈をする可能性があります。判断を誤ると間違った「決心」になってしまいます。ビッグブックの第3章「さらにアルコールリズムについて」に登場するフレッドの話が参考になります。

—知識として分かっている酒は止められなかったという興味深い話ですね。

例に挙げられているのは、会計事務所を共同経営する事業家のフレッドの話です。入院した病院で飲酒の禁断症状に襲われて苦しむ中、メッセージを運びにきたAAメンバーからアルコールリズムについて知り、「自分は大丈夫。自覚こそが問題を解決する」と決意しました。その結果、しばらくは禁酒が続きましたが、ワシントン出張の際にホテルで食事と一緒にカクテルを飲んで連続飲酒となり、気付くと病院に入院していました。そして再び面会に訪れたAAのメンバーに回復プログラムの話を聞き、実践しようと「決心」するのは、するとアルコールの問題から解放されたような不思議な感情に襲われたと記述されています。フレッドは自分自身で解決できると誤った「決心」をしてしまい再飲酒に陥りました。正しい「決心」が大事です。

—誤った決心をしないうためには?

ステップの道案内をするスポンサーが必要です。スポンサーと一緒に学ぶことによって効率よく正しい理解に立ったステップが身に着き、自分を変えられるのです。スポンサーは、自らがアルコールクであり回復プログラムによって人生を取り戻した経験者でなければなりません。一緒にプログラムを実践し、相談者として助言や提言をもらいます。その関わりをスポンサーシップと呼びます。本を読んだだけではステップをやったことにはなりません。スポンサーとともにプログラムを始めようと決めたならすぐにステップ4が始まり、この段階で既にステップ3を踏めたということになります。(解説 = 藤田良・精神保健福祉士、終わり)

※施設では基本的にステップ1～3の繰り返しのウエートを置くので、ひとまず今回で本企画を終わります。

音楽講師・川島有紀さん

## 歌祭りステージ



## 潮騒&amp;千葉ダルクの合同エイサーが応援演舞

潮騒JTCの音楽ケア・プログラム講師を務める、行方市在住のプロ歌手・川島有紀さんの「チャリティー川島有紀いやしの歌祭り」が6月30日、同市山田の市文化会館で開かれました。歌祭りには、いずれもエイサー隊の潮騒JTC「鹿嶋琉球太鼓」のメンバー12人と千葉ダルク「琉球太鼓」のメンバー8人の総勢20人が招かれ、合同によるエイサーの見事な演舞を繰り広げました。また、川島さんから歌唱指導を受けている潮騒JTCの仲間5人が、1部のカラオケ発表会に出演して自慢の喉(のど)を披露しました。

歌祭りは、歌手活動12年目を迎えた川島さんが、地元への地域貢献の一つとして音楽による癒しのひと時を楽しんでほしいと企画し、川島さんが所属する音楽事務所が主催しました。後援会の鹿行支部が協賛したほか、市や市商工会、潮騒JTCなどが後援し盛り上がりました。

2部構成で開かれ、1部がカラオケ教室の生徒ら108人がエントリーしたカラオケ発表会。2部の歌謡ショーには川島さんのほか、いずれもプロ歌手の平浩二さん(昨年の潮騒13周年フォーラムにも応援出演)、真木ことみさん、奈良崎正明さんの4人が出演。会場は満員(542人)となったほか、大勢の立ち見であふれました。

開催にあたっては、ぜひ「鹿嶋琉球太鼓」にも出演してほしいと依頼があり、リーダーのヒトシさんが3年前から潮騒JTCのフォーラムに応援参加してくれている千葉ダルクのエイサー隊リーダー・スズさんに声をかけ、合同で演舞することになったそうです。「鹿嶋琉球太鼓」は1部の開幕に登場。3曲を演舞して同歌祭りを盛り上げました。半年間エイサーの練習を積んできたジローさんが仲間と共に登場してデビューを果たしたほか、エイサー隊

に参加したばかりのブチさんもエイサー姿で登場しました。ジローさんは「緊張して最後にミスが出たが、やり切りました」と満足した様子で話しました。

千葉ダルクの「琉球太鼓」は昼過ぎの合同演舞に登場。今年2月から同歌祭りと今年のフォーラムに向けた月1回の合同練習の成果を見せました。合同エイサー隊が、一糸乱れぬ演舞を繰り広げると会場は太鼓の音で震え、観客たちは迫力あるバチさばきに大きな拍手が送られました。演舞後スズさんは「絶好調でした」と話し、ヒトシさんも「暑くて参りましたが、野外で行う今後の演舞にはいい経験になった」と感想を述べていました。

合同エイサー隊の舞台では、東京から駆け付けた元タレントのマーシー(田代まさし氏)が特別ゲストとして登場して進行役を務め、得意の駄じゃれとギャグで聴衆を沸かせました。エイサー隊の演舞が終えたステージでは、マーシーがペピーノ・ガリアルディの歌うイタリア映画「ガラスの部屋」の主題歌が流れる中、お笑いタレントの「ヒロシです」をもじった自虐ネタ「マサシです」を披露。会場は大爆笑の渦に包まれました。

続くステージには、潮騒JTCからカラオケ大会の出場枠5人に選出されたブーちゃん、一郎さん、ヨイチさん、シゲさん、コバさんが順番に登場。各自の選んだ持ち歌を歌い上げると、大きな拍手が送られました。会場には栗原センター長と原田雅也事務長のほか、数人のスタッフと入寮仲間48人が応援に駆け付けました。センター長は「カラオケの進歩とともに一億総歌手と言われる中で、会場全体を巻き込んで踊る沖縄伝統芸能のエイサーには価値がある。仲間たちの歌も練習の成果が出て大変良かった」と笑顔で話していました。(岩)

## 60歳からの回復

NO66

神栖市内のアパートで  
「名も無き」回復施設を立ち上げる

潮騒JTCセンター長 栗原 豊

2005年の春ごろから、本格的に鹿島ダルクから離れることを決意したものの、私はなかなか行動を起こせずに独り悩む日々が続いていた。当時の私には独立して新たな回復施設をつくるにしても先立つものがなく、地元で自分を支える有力な支援者も人脈も組織もなかった。あるのは、ただただ「自分のダルクをつくりたい」というギャンブルにも似た情熱だけで、あの時の状況を知る公平な第三者がいたなら、「そんな無謀な計画はやめた方がいい。もっとうまく立ち回って、焦らずにチャンスを待つべきだ」と止めに入っただろう。

とにかく無い無い尽くしの逆境の中で、唯一の救いは「俺はユタカと行動をともにする」として独立を支持する仲間5～6人の存在だった。みんな超個性的で病気(依存症)の深いメンバーばかりで、あれこれトラブルメーカーのような存在だった。あれから14年もたっているのに亡くなった者もいるが、今も何人かは潮騒JTCに残って、日々回復プログラムに取り組んでいる。みんな老いが目立つ年齢になったものの、生涯にわたる回復途上者として今も私と行動を共にしてくれている。昔の苦勞を知る古い仲間は、私には貴重な証言者と言える。

私が独立の機会を探っていたある日、温泉プログラムで知り合った地元の人から思いがけない提案を受けた。温泉プログラムとは温水プールや温泉(沸かし湯)などに浸かり、温泉での効能からリラクソスの手段を学んだり、プールで泳いだりする中で健康増進や体力向上を目指すものだ。当時の鹿島ダルクは週に一度、地域の健康ランドや神栖市の健康増進施設などを利用し、このプログラムを組んでいた。私もこれに参加していたので、少しずつ地元の利用者と顔なじみになる機会が増えた。その中に市内のあるサービス業の経営者がいた。何気なく私が「施設に使えるアパートを探しているんだ」と水を向ける

と、その人は「自分が営む店の従業員用アパートに3部屋空きがある。これを使わないか」と言う。渡りに船とはこのことだ。

でも、「待てよ」とも思った。当時の私は当座の運営資金さえ用意できる状況になかった。刑務所から出て3年にも満たないだけに、社会的な信用はゼロ。どうあがいても私の元の家族や親類には頼れない。ローン会社のブラックリストにも載っており、銀行融資を受けることなど不可能だった。正直にそのことを告げると、その人は私の情熱に打たれたのか、「敷金や礼金はいらないよ。必要ならすぐ使えばいい」。こうして超破格の条件でアパートが借りられた。やはり我がハイヤーパワーは私を見捨てていなかった。

2005年6月、私はいらぬトラブルを避けるために鹿島ダルク側の同意も取り付け、施設内の5～6人のメンバーとともにこのアパートに移動した。実質的には、この時が私の物理的な意味での「独立」である。もちろん、この段階では施設名など名乗れない。並行して、まだ鹿島ダルクでの寮長としての仕事をこなしていたので、私も勢い慎重にならざるを得なかった。仲間たちもしばらくは鹿島ダルクと自分たちのアパートとの往復が続いた。

表向き看板は上げられないとしても、私と随伴の仲間たちは「過去はもういい。これから自分たちの未来に向けて踏み出そう」と新たな船出の気持ちに満ちていた。でも、所詮はアディクト(依存症者)の悲しさである。神栖市内で自ら運営することになった、このアパートの3部屋から始まった「名も無き」私たちの回復施設は、船出から激しい荒波を受けた。回復のプログラムはもちろん、柱となるミーティングや自助グループ(NA)への参加もままならず、単なる生活の場でしかなかったからだ。念願だった仏をつくったものの、肝心の魂が宿るようになるには、まだまだ試練が待っていた。(次号に続く)

# 受刑者 からの手紙

居住環境が改善されてきたとはいえ、矯正施設は夏の暑さと冬の寒さが受刑者を苦しめます。これを更生に向けた試練と受け止め、前向きに生活してほしいと、口で言うのは簡単ですが、当事者の感情としては複雑だと思います。潮騒の仲間が待っています。どうか腐らずに試練の時を耐えてください。

## この3年は我慢と忍耐だけの受刑生活を過ごしてきた

潮騒の皆さん、元気でお過ごしでしょうか。北の大地では5月頃から、ようやく屋外運動が出来るようになり、太陽の下で思いきり身体を動かせることができ、多少ストレスの発散になっています。でも、半ば頃からは異常に暑さが厳しくなったりして、天候も変な日々が続いています。早くも酷暑だった昨夏の辛さを思い浮かべてしまいます。

今月は私の誕生日でもあり、本面は終わっているもののどうやら、またひとつ塀の中で重ねなければならぬ感じで残念です。私の人生、半分以上がヤクザ渡世で、その半分ほどを塀の中で過ごしました。50を過ぎてまさか塀の中に落ちるとは思ってもみませんでした。致し方ありません。この3年余の受刑生活を思い返せば長いようであるという間のような気がします。ただただ我慢と忍耐だけの受刑生活を過ごしてきました。

己の人生を振り返っても、これほどまでに我慢を重ねてきたことなどなかったと思います。努力の結果が1カ月ほどの仮釈つというのには正直納得いかない所ではありますが、満期を務めて出所するのが当然と思つて渡世を張ってきたのですから、我慢と忍耐を続けた努力は何かしら己の身体の実になったと思うことにします。栗原センター長も任侠の人であったので、私も縁あってこうして手紙のやり取りをさせて頂いておりますので、この先何らかの形で手助けができればと考えております。

施設が大きくなるにつれて、人材の不足など運営面での課題も多くなってきて大変な上に、センター長がいくら元気だと言っても年齢を考えれば次の世代への移行も考えなければいけない時なのだと思います。私ごときが口にすべきことではありませんが、栗原センター長にはいつまでもお元気で陣頭に立ち、私たちの様な者を導いてほしいと願っています。

私も7月中には仮釈で出所できるのではないかと考えていますが、社会で残置してきた物や事、身の整理をつけて、潮騒での回復プログラムに専念できたらと考えておりますので宜しく願い申し上げます。これから暑い季節となりますので、くれぐれもお体ご自愛下さい。シゲさんも元気で頑張ってください。

(福島県 Y・T)

## 私は梅雨明け後の夏の青い空と白い雲が大好きです

潮騒通信が届きました。ありがとうございました。栗原センター長のお気遣いに深く感謝致します。シゲさん、お元気ですか。皆様もお変わりございませんか? シゲさんの回復記は本当に楽しいですね。毎回楽しみにしています。裁判は粛々と進んでいます。7月には判決を頂戴致します。皆様が支えてくれたおかげです。良い結果を報告できたらいいなあと考えています。まだぼんやりした感じですけど…。梅雨の雨が済んだらいいよ夏ですね。私は夏の青い空と白い雲が大好きです。季節の変わり目は風邪を引きやすいので、栗原センター長もシゲさんも潮騒JTCの皆様もお体に気を付けて下さい。取り急ぎお礼申し上げます。

(北海道 S・O)

# しおさい俳壇

7月のお題

蛍

選者 桐本石見

特選句

螢火の  
一つ希望の灯としたる

くま

今ではあまり見れなくなった蛍だが、まだこの鹿島潮来では少し山辺に行くと見れる。また人間は古来から太陽や月、遠くの灯火も希望の支えにして来た。今は苦しい自分だが、蛍の一つの光にも明日への望みを思う。切々の句で、遠くの灯台の灯も彷彿します。

特選句

命日の  
小窓に来る蛍かな

芝

何方の命日だろうか。蛍からは母とか女性の縁者を想いますが、家でも法要などしたのだろうか。それらも済んで少し夜も静かになった頃、ふと見ると窓に蛍が一つ来ている。よく死者の魂とも言いますが、肉親の命日であれば在りし日の姿も想い懐かしい。また地震や津波の被災を思えば切ない。しみじみした句です。

特選句

水音の  
清きなりけり蛍狩り

ゆたか

日本には四十種の蛍がいると言われ、多く見るのが川の中流に棲む源氏蛍、水田に棲む平家蛍。何れも田舎の夏の風物詩でもあった。この鹿島神栖では音の聞こえる小川も無いが、私の故郷島根では川と言えば瀬音やセセラギが聞こえた。蛍も美しいが水音の聞こえる川も懐かしい句です。

## 俳句へのいざない

### 第二回 古事記、万葉集、和歌へと続く漢字文化の発展史

先月では、声言葉になり仕事の掛け声や唄が生れたと申しましたが、それは紀元前の事で、一世紀頃中国から貨幣が伝わり、それに文字が刻まれていました。始めは文字を記号とと思っていましたが、三世紀頃になると魏志倭人伝で名高い邪馬台国では中国と国交があり、その頃から漢字で文章も作成される様になり、音読みを訓読みとして使う様になったと言われます。

また仏教伝来は552年とも言われ漢字文化も発達し、日本最古の史記古事記も712年に編纂(へんさん)されました。漢字が伝わって300余年くらいで素晴らしい史記が出来たこととなります。その中には「八雲立つ出雲八重垣…」を始め多くの歌が納められており、漢字を使い歌も書いた訳です。

そして759年頃には、年号令和の元になった万葉集も編纂されます。万葉集は130年間くらいの間の歌4,500首を集めており、その頃から日本人は歌を詠む文化が育ったとも言えますし、労働歌から民謡も生まれました。また見方を変えれば昔はカメラや携帯が無いので意思や見た事を伝えるには文章や絵が一番であったとも言えますし、平安時代には草書や「ひらがな」が考案され恋文など歌に託す文化はロマンを思います。

こうして日本人は室町時代になるまで和歌を詠み、その返事も歌で答えるのが続きます。和歌は五七五七七の調べを持って読みやすく覚え易く、また語句に名詞など意味を重ねて難しいものもありますが、日本の誇る文学の一つでもあります。まとめますと、今日は漢字や仏教、和歌の歴史を勉強しました。(続く)



# 今月の秀逸句

## 雨後に君思い出す蛍かな

アオ

夏の雨の後は少し蒸し熱く薄霽(うすもや)も漂うが都会ではネオンなど濡れて美しい。蛍の飛ぶ田舎でも少しの艶冶(えんや)を思い、昔に恋した女性を懐かしく思い出す。若き日の切々の句。

## 大都会蛍代りの流れ星

モト

大都会は東京や大阪を思いますが、今では特別に蛍狩りでもして運ばないと見れないかも。流星も都会の灯で見難いが、それでも時には見れるかも。現代を思う句です。

## 幼な日の恋浮き消ゆる蛍の火

ヨイチ

昔は近くの川辺でも蛍が見れたので、近所の子達と蛍狩りをした。その中に好きな子がいて片思いでもした思い出かもしれない。蛍火を眺めているとその子の俳(おもかげ)も浮び消える、少しの艶冶と儂(はかな)さを思う句です。

## 蛍狩り今宵どこまで神の道

オノ

神の道は鹿嶋市の名所古跡を辿るハイキングコースで約十五キロの道程。その中に蛍の里、剣聖の里、鹿島神宮、鹿島城址、などある。

その蛍の里を尋ねて夜道を歩いたのだ。「蜻蛉(とんぼ)釣り今日は何処まで行ったやら」(加賀千代女)を思う句ですし、また夜道は少しのロマンもあります。

## 初蛍あそこあそこ五歳の子

あべ

初蛍はその年に始めて見る蛍で、いよいよ夏になった思いにもなる。田舎などに行つて子供が見付けて母などに告げる、微笑ましい実感の句です。

## 蛍火や平家源氏もいま睦む

シゲ

平安時代源頼政が平家打倒を企てたが、陰謀が露見し宇治平等院で討たれた。その亡霊に因んでこの名があると謂れ、その後源氏が鎌倉幕府を開いたので、大きいのが源氏、小さいのが平家源と伝えられる。その後源氏も滅び時代を経た今は夜空に仲良く飛び交う。哀れと歴史を思う句です。

## 蚊帳内の幼な頃の蛍かな

ゆたか

今では田舎でも蚊帳は少ないが、子供の頃は外よりも蚊帳の中が何か楽しい時もあった。蛍も多くいて、何匹か放つと又別な美しさに魅了された。その故郷も蛍も今は遠くに懐かしむ句です。

### 佳作

回復の心を照らす蛍かな	のん	手に取って光眩しむ蛍かな	あきら
暗闇に飛び交う蛍印禰沼	みく	蛍飛ぶ幻想の宵待ち侘びぬ	レモン
暗がりの神の道ゆく蛍狩り	ヒロ	蛍火や鹿嶋の里に幾年日	アオ
蛍火や父の面影偲ばるる	トム	懐かしや蛍の群るる里の夢	モト
明滅に命ぞ思ふ蛍かな	あさ	蛍火の舞えばすぐにも母思ふ	あつちゃん
漆黒の宵に宿せる蛍かな	れいこ	舞ひ飛べる蛍のお尻綺麗だね	ゆうこ

※潮騒通信6月号の潮騒俳壇の次の作品の解説文が間違っていました。お詫びして正しい解説を掲載します(お題は「田植え」)。



## 潮騒の恒例田植え出揃ひぬ

オノ

潮騒では四町歩余の田植えをするとのこと。昔は唱歌にある様に「そろた出そろた植え手がそろた…」と歌われる様に、集落縁者が共同で田植えをした。今では家族で機械植えするので人数も少ないが、それでも関係者が集い賑やかに田植えをする。スポーツでも同じだが仲間と共に勝ち得た勝利は感慨深い。昔の田植えも集落の絆の一つでもあった。恒例の田植えの賑わいの景が浮かぶ句です。

どっこい

私も生きてます ~我が回復記~ 「アル中のシゲ」の巻

第13回

財布の中身が100万円を切り、体の衰弱も激しく吐血する

もはや私のアルコールはブレーキが利かず、幻覚幻聴も途切れなく現れるようになりました。日々、無為な時間だけが過ぎるなかで、ホテルの部屋で空しい酒浸りの日々を積み重ねるだけでした。ある日ポケットから財布を取り出し、中身を見ると、なんと100万円を切っているではありませんか。さすがの私も焦りました。過去には5000万円もあったお金がもう100万円もないのです。ふつうならサラリーマンが一生真面目に働いても、これだけ貯めるのは容易なことではありません。でも、私は箸(はし)にも棒にも掛からないアル中です。このまま持ち金なくなるまで、同じことを繰り返すだけです。ひたすらアルコールを飲み続ける行為が、私の人生を完全に支配しているのです。

しかし、体は正直でした。もはや私の体はアルコール以外のものは受け付けなくなっていたのです。衰弱が激しく、鏡を見ると顔はげっそりとやせてムク「叫び」の人みたいです。まるで別人になっていました。化け物のような醜い顔だったので、私はなお一層、幻覚幻聴におびえるようになりました。恐怖の現実から逃げようと、更に酒を浴び続けました。そんななかで、ある日急に気分が悪くなり、吐き気をもよおしてトイレの便器におう吐すると、なんと便器が血の海になっていたのです。吐血でした。さすがに驚いたものの、それでも私は酒を飲み続けました。「もうどうなってもいい」と。(次号に続く)

7月のバースデイ



ラプリー

少し嬉しいです。



イワミ

病気負けず  
ガンバル



キラ

カズさん、  
愛してる。♡



ナベ

今日一日。



きんちゃん

映画に  
行きたい。



ツカ

仲間を許す。



ツグオ

感謝しています。



ショウ

平凡な日々...



イサム

回復を  
目指すぞ!



モッサン

年は  
とりたくない。



チョーさん

トムが  
結婚するまで  
生きてるぞお!



ヒーさん

還暦  
2年目です。



ミグ

ひとしさん、  
愛しています。



トモ

ありがとう  
ございます。



ケンボウ

センター長、命。

## 7月の行事

- 7月9日 潮騒 VS 百寿交流ソフトボール(第5回)
- 7月11日 潮騒俳句会
- 7月13・27日 潮騒ミュージックケア・プログラム
- 7月14・20日 秋元病院メッセージ
- 7月20日 うしほり保育園夕涼みの会(エイサー演舞)
- 7月21日 茨城ダルク 27周年フォーラム(結城アクロス)
- 7月26日 グループホームさくら荘エイサー演舞(行方市)  
みその保育園夕涼みの会(エイサー等)
- 7月27日 野外フェス「アラレフル」(平井海水浴場)
- 7月28日 潮騒家族会  
2019KASHIMA 文化交流フェスティバル  
ピアサボ世田谷

## 8月の行事予定

- 8月2日 大和ハウジングなごみ館(エイサー演舞)
- 8月8日 潮騒俳句会
- 8月10日 潮騒人間塾(第3回)
- 8月11・17日 秋元病院メッセージ
- 8月25日 潮騒家族会  
千葉ダルクとのエイサー合同練習

## 献金・献品を頂いた方(7月15日現在)

- ・長谷川 トキ子 様 ・野本 俊子 様
- ・高田 武義 様 ・鹿嶋神の道運営委員会 様

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。おかげさまで潮騒 JTC は、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させていただきます。どうぞご理解のほどをお願いします。

## 編集後記という名の独り言

この年(65歳)になって、やっと分かったことがある。それは人生なんて、いくらあがいても所詮はなるようにしかならない、ということだ。若い頃は、それが全部ではないにしろ、頑張れば頑張るだけ結果が出て報われるという、自分への過信みたいなものがあった ▼僕の人生はほぼ右肩上がりの、この国の経済成長期の歩みと重なった部分が多かったの、そうした価値観が勢いを持ち、巷に行き渡っていたように思う。みんなで一生懸命に働いて経済的に豊かな国になろう、貧しさから脱しようという共通の目的があった。それを支えたのは疑う余地のないパワーゲーム(競争主義、覇権主義)への信仰である。ある意味、牧歌的な時代だった ▼しかし歴史が物語るように、そうした上り坂の繁栄は長くは続かない。悲しいかな、その後この国は目先の事にばかり目が向き、国力が衰退していく長期ビジョンへの対応は後手に回った。その結果が今の閉塞状況である。それが社会病理として露出し、不気味な犯罪が多発しているのは周知の通り ▼ともすると「他人くたばれ、我繁盛」という狭い島国根性ばかりが目につく昨今にあって、依存症の回復ではダルクや潮騒JTCは「失敗しても立ち直れる、人に優しい社会を」「みんなが本音で楽に生きられる世の中を」と説き、社会を動かしてきた価値観からのパラダイムシフトを促している。身びいきだとしても宗教をも超える、愛とヒューマンイズムの新たな社会ビジョンの創出、とでも言えるだろうか ▼翻って自分の足元を見ると、重い障害者の子を持つ運命を背負ったことでパワーゲームに縛られずに、ほどほどで生きる人生を選択できたことが良かった。それがダルクや潮騒JTCを支持する根拠の一つでもある。時おりダルクをつくった近藤恒夫さんに会うと、その好々爺の風貌とこちらの構えを崩す、何とも味のある雰囲気魅了されて、ほんわかと幸せな気分になるから不思議だ ▼近藤さんだって人間だから、こちらが重たい問いで水を向けると、鋭い眼光を垣間見せることがある。それらを含め、「この人は回復者として信頼できるなあ」と思わせるのだ。一方、相変わらずダンディさが際立つ我が栗原センター長。僕にとっては、近藤さんと同じく人生の師である。年に関係なく人は本当に変わるのだ。そのことを理屈ではなく生き様として教えてくれる ▼だから潮騒に出向くたびに、センター長の味のある好々爺の風貌と笑顔を見られることが、老いゆく自分の励みになっている。(市)

## 潮騒通信 どっこい生きてます! 2019年7月

## Contents

- P ② 我が身の16回目の「クリーンバースデー」に思う
- P ③ 「潮騒人間塾」元スタッフで神学生 海東 強さん
- P ④ るみの家「家族面談の試み」
- P ⑥ 近藤恒夫さんメッセージ「失敗してもやり直せばいいじゃないか」  
第1回：私のヤク中人生はフェリーでの歯痛がきっかけだった
- P ⑧ しおさい Q&A 講座 [12ステップ理解へのアプローチ] 第7回  
ステップ3(後半)  
「神の配慮にゆだねる決心」をどうとらえるか?
- P ⑨ 歌祭りステージ  
潮騒 & 千葉ダルクの合同エイサーが応援演舞
- P ⑩ 60歳からの回復 NO66  
神栖市内のアパートで「名も無き」回復施設を立ち上げる
- P ⑪ 受刑者からの手紙
- P ⑫ しおさい俳壇 7月のお題「蛭」
- P ⑭ どっこい私も生きてます「アル中のシゲ回復記」/7月のバースデー
- P ⑮ 行事予定 / 編集後記 / 献金・献品 / 目次



## ■ 編集・発行:

特定非営利活動法人  
潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)  
〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34号  
〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10  
TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091  
潮騒アディクションビレッジ会館  
(潮騒アディクション・ケアセンター)  
〒314-0031 茨城県鹿嶋市宮中 4-4-5  
TEL:0299-95-9991 FAX:0299-95-9992

E-メール [k.s-darc@orange.plala.or.jp](mailto:k.s-darc@orange.plala.or.jp)

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>

